

持ち前の行動力で生産と販売 道有機農協の組合長として構

有機農産物を直売する石狩の「はるきちオーガニック

今から20年余り前、石狩市出身のひとりの若者が大学卒業後の国内外での研修生活に区切りをつけ、地元で有機野菜の栽培を始めた。学生時代のアルバイト先の居酒屋で生産者らと出会い、触発されたのがきっかけ。持ち前の行動力を生かし、農産物などの直売所を開き、さまざまな社会活動にも奔走。その直売所「はるきちオーガニックファーム」は、今や多くの人たちに知られる存在になった。今年春には、生産者や消費者でつくる「北海道有機農協」の代表理事組合長に就任し、時代の変化を踏まえた新たな販路開拓などに意欲を見せる——。そんな同ファームの軌跡や有機農協が抱える課題などをたどりながら、北海道の有機農業を取り巻く状況を紹介する。

(ルポライター・滝川 康治)



午前10時のオープンとともに、待ち構えていた人たちがお好みの有機野菜などを買求める

当時の小林さんは、「有機農業は素晴らしい！」と思うあまり、頭に知識を詰め込む傾向が強かったという。そうした捉え方を変えたのは、農家を実家にもつ人たちの就農を支援し、日本農業の変革をめざすNPO法人「農家のこせがれネットワーク」に参

もあつたので今、農業という天職に就けたのかもしれない。
両親から後継者になれと言われたことはなく、自身も農業以外の道に進むのだろうと考えていた。97年に北海道大学工学部に入學し、環境工学科で水処理や廃棄物などについて学ぶ。河川や湖周辺の地下水のことも研究する中で、環境に負荷をかけない道を模索していく。

そんな学生時代、北大の近くにあった居酒屋「春吉」でアルバイト。オーナーで有機農産物の認証事業にも関わってきた塩田彦隆さんとお会い。店では、新篠津や瀬棚、当麻などの有機農産物を扱っており、生産者との付き合いもできた。塩田さんからは「お前の実家は農家なんだから、早く農家をやれよ」と背中を押された。こうした体験が現在の仕事をする出発点になったという。

卒業後は、オーストラリアや道外の農場、国を挙げて有機農業を進めるキューバ、伝統的な種子を大切にするインドなどを訪れ、研修を重ねる。農業経営の厳しさや面白さを肌で感じ、貴重な経験を積んだ。

2004年、親が所有する市内美登位の農地60アール(2千坪弱)を使って有機農業に着手。事実上の親元就農ではあるが、新規参入者のようなスタートだった。

当時の小林さんは、「有機農業は素晴らしい！」と思うあまり、頭に知識を詰め込む傾向が強かったという。そうした捉え方を変えたのは、農家を実家にもつ人たちの就農を支援し、日本農業の変革をめざすNPO法人「農家のこせがれネットワーク」に参



石狩市内で「はるきちオーガニックファーム」を切り盛りする小林卓也さん、芳見さん夫妻。15年前に農場の仕事を手伝ったことが縁で結婚。夏場は分担しながら直売所を運営してきた

旬の有機野菜など欠かさずに直売所の運営を中心に農場経営

石狩湾新港から数キロほど、住宅地と農地が混在する石狩市の花畔地区。小林卓也さん(1979年、旧札幌市生まれ)と妻の芳見さん(77年、札幌市生まれ)が営む「はるきちオーガニックファーム」の直売所(夏場は週4日営業)には、午前10時のオープンを待つ人たちが並ぶ。ここで扱うのは、春のアスパラガスに始まり、山菜や葉物野菜、夏のトマトやメロン、トウモロコシなど、秋のキャベツや白菜といった越冬野菜と、途切れることなく続く。そして、11、12月には漬物用の大根やゴボウなどの直売で締めくくる。

小林農園の野菜たちは、いずれも有機栽培されたもの。平飼いの卵や野菜の苗、豆類、ハチミツ、お茶なども販売し、すそ野が広い。

直売部門は主に芳見さんが切り盛りし、卓也さんは農場スタッフとの打ち合わせや農作業、買い物客との対応……と仕事を分担している。

「うちの直売所には、いつも旬のものがある。週1回来てもらえたら、お客さんの期待に応えられる店づく

りをめざしています。今年から営業時間を午前10時(従来は同9時)から12時までに変えて、ギョツと詰めた。準備が大変で、うちのスタッフに迷惑がかりますからね」と、卓也さんが話す。

小林さんの両親はかつて、市場出荷に適さないアスパラを安い値段で無人販売していたという。小林さんの代になって、この直売スタイルを止め、試行錯誤をくり返ししながら現在のやり方に落ち着いてきた。

農場の面積は5・7ヘクタールほど、売上高の約6割を直売所が占める。顧客の中心は札幌市内の人たちで、日常生活に少し余裕のある人が多いらしい。「有機農産物の質の豊かさに価値を感じ、お金を払う人が増えてきたんじゃないか」(卓也さん)と捉えている。

居酒屋のバイトで「有機」に接し「こせがれネット」で考えを転換

小林さんは、小学生のころから野菜の直売が好きで、自転車の荷台に積んで売り歩いたという、珍しい経験の持ち主だ。「野菜がもったいないし、近所の人と話すのが楽しかったですね」とふり返る。そうした原体験



大震災の直後、被災地支援のマルシェに
奔走したころの小林さん(11年4月撮影)

の提携先のひとつに京都市内で環境負荷の少ない農産物の卸販売や宅配、オンラインショップなどの事業に取りくむ「坂ノ途中」(小野邦彦代表取締役・年間売上高25億円)という会社がある。西日本を中心に新規就農者ら

協の代表理事組合長に就任した。25年前に誕生した同農協の第3代組合長である。

有機農産物の取り扱いに特化した専門農協で、62人の正組合員(生産者)の7割が新規就農者。農協の運営にも参画する准組合員(消費者)も5百人近くが加入している。

小林さんと有機農協との出会いは、東日本大震災があつた15年前に有機生産者の会議に顔を出したのが初めてという。直近の3期9年間は理事も務めた。長らく出荷してきたが、もともと直売所の比率が高く、全体の5%と少なかった。

前組合長の小路健男さん(安平町在住・本誌25年9月号参照)によると、24年度の取扱高は4億円余りとどまり、正組合員数に比べて少な

い。またカット野菜をはじめ、麦類・豆類・雑穀などの加工原料や有機加工食品に対する需要があるものの、「組合に対する出荷率が低く、貯蔵施設もなく、即応性がない、1戸あたり作付面積が少ないなどの課題を抱えている」(昨年3月、道農政部主催の有機農業全道交流会での講演で)という。

そんな中で重責を担うことになった小林さんは、「組合員の出荷割合が低いのは、有利な価格で取り扱ってこなかったことが原因でしよう」と分析。そして、「(理事を務めたものの)僕自身もこれまで組合長になる気はなかった」とふり返る。

では、なぜ最高責任者を引き受けたのだろうか――。

の提携先のひとつに、
京都市内で環境負荷



春の味覚はハウス栽培のアスパラガスから。お客さんに強い人気がある

約3百戸と提携し、事業を拡大しているが、道内には拠点がなく、新たな展開を模索してきた。

『坂ノ途中』には（事業などを支える）エンジンアもいるけれど、有機農協は受注システムがFAXベースであり、運営体質は昔のまま。そこで先方との業務提携によつて農協の運営に協力しようと考え、組合長を引き受けました（小林さん）

本誌でも紹介してきたように、20
30年前までは有機農業に対する認

被災地の支援活動にも奔走
結婚後は直売や研修に注力

2011年3月11日に発生した東
日本大震災の直後、小林さんは「こ
せがれネットワーク」による被災地
支援のマルシェ「生命をつなぐチャ
リティー・ファーム」に参加した。
道内の農場が生産物を提供し、札幌
駅前通の地下歩行空間(チカホ)で販
売し、売上金を被災地に寄付する
という企画だ。

筆者は当時、農業雑誌の取材で小
林さんと初めて会っている。このマル
シェを終えた数日後、石狩鍋の食



住宅地と農地が混在する花畔地区にある直売所。野菜類のほか苗物や平飼い卵なども販売

加したことが大きい。

同ネットワークは2009年に神奈川県内の養豚農家の“こせがれ”が中心になって設立(17年に解散され、小林さんと同世代の人たちが北海道グループを創った。ここでは、有機農業を推進すること自体は目的とせず、理に合った方法で栽培する中で高品質のものが生産できる——といった考え方がよく語られ、実践されていた。そうした仲間たちに触発された小林さんは少しずつ見方を変え、“有機”を強調しないようになっていく。

材120食分を用意して岩手県内の被災地に向かい、避難所で炊き出しを行なった。その行動力がすごい。

この震災の年、農作業の手伝いに訪れたのが縁で清宮(旧姓・芳見さん)と結婚した。農場の仕事のかたわらさまざま活動に取りくんでいたころだ。

芳見さんは、東京の文化女子大学（現文化学園大学）を卒業して服飾関係の仕事に携わったのち、JICAの青年海外協力隊のメンバーとして

アフリカに派遣された経歴の持ち主結婚後は、二人三脚で農場を切り盛りしていく。今ではふたりの男の子の親でもある。

卓也さんは、農場の仕事のほかにも地元農協青年部の役員としてTPP交渉の反対運動の中で国会前の座り込みに参加したり、石狩湾新港で開催されるロックフェスティバルの企画にも加わるなど、多忙な毎日を送ってきた。

「3・11」後は、農閑期になると高品質の農産物を生産する慣行栽培の農家を訪ねる一方で、つながりのある有機農産物の流通関係者らとの交流などを重ねた。

新規就農を志す人のサポートもしている。ここで研修した30代の女性
が昨年、近所で就農してスイカなど
を作つて北海道有機農協に出荷。「今
後も機会があれば就農のお手伝いを
したい」と意欲を見せる。

やや尖った印象を受けた15年前に比べ、表情が柔らかくなり、農家として、また人の親として円熟してきているように思う。有機農業に対する捉え方についても同様のようだ。

『有機』の意味は『機有り』であつて自然の摂理に従ふべきということ。

そのポテンシャルをいかに引き出すのか。簡単にいえば、きちんと土づくりをして、適期に（作物へ）水をやるということですね」

農場のホームページでは、「有機野菜」といっても、美味しさが第一」と強調。そして、「有機野菜を普段使いできる」「ハレの日に贈りたくなるオンリーワンの有機野菜になることをめざす」との目標を掲げる。

北海道有機農協の組合長に就任時代の变化の中で販路の拡大へ

小林さんは今年春、北海道有機農



品質が良く美味しい有機野菜の育苗ハウス

知度が低く、まさに「勇気農業」だった。だが、今では国や道も推進に乗り出し、時代は大きく変わった。

「ここ数年、有機農協の組合員は毎年5戸ずつ増え、新しいフェーズが訪れました。既存の取引先に加え普通のスーパーが魅力のあるアイテムとして有機農産物を扱うところも増えていきます」と、小林さんが自信をのぞかせる。

一方で、有機農業の第一世代が一線を退き、今後は人手不足を補うために自動操舵やドローンなどの導人によって、一部の農家が淘汰される事態も予想される。また近年の傾向として、慣行栽培の親の元の後継者が帰り、ビジネスライクに有機農業に取り組む人もいるという。

「従来の体質の新陳代謝を図りながら、最初から10ヘクタール単位で有機栽培を手がける生産者をより増やし、新しい取引先につなげていきたいですね」と、今後を見える小林さん。これまでの取り組みの真価が問われる時代になった。

■はるきちオーガニックファーム
石狩市花畔363-13

TEL : 0800-40461116
ID : harukichi-farm.com